



立教大学大学院文学研究科を経て文学博士。2000年4月に熊本大学文学部助教授、2009年から熊本大学文学部附属永青文庫研究センター教授。2014年より同センター長。著書は「戦国時代の荘園制と村落」「永青文庫叢書 細川家文書 中世編」ほか。「永青文庫叢書 細川家文書 中世編」で、永青文庫研究センターとして、第32回熊日出版文化賞を受賞。

【専門分野】日本中世史・近世史。とくに戦国時代の社会構造研究。

熊本城の震災の歴史 —「今から」を歴史にするために過去に学ぶ

はじめに —古文書から熊本震災の 歴史を知る

熊本大学の附属図書館では、熊本藩主を200年以上つとめた細川家に伝来した莫大な量の美術品や歴史資料（古文書・古記録）などの大半をお預かりしています。私が所属する永青文庫研究センターは、熊本地震から半年の間、これらの膨大な古文書の中から、過去の地震などの災害の被災や復興の記録を検索し、調査を続けてきました。

世界の中で、日本ほど、前近代の古文書などの資料を現在に伝えている国は珍しいです。永青文庫では細川家のような支配層の屋敷や役所に蓄積されていた古文書を保管していますが、民間でも沢山の古文書が蓄積され、現代まで伝えられています。しかし、その99%ぐらいは文化財指定を受けていません。そのため、今回の地震では、民間のお宅で保管されていた多くの資料が被災してしまいました。そこで私たちは、地震

直後から、民間のお宅で管理されていた古文書の救済などのボランティア活動も行い、それらの記録の保全につとめてきました。この講演では、今回の熊本地震でシンボル化されている「熊本城」の震災の歴史について、調査に基づいたお話をしたいと思います。

熊本地震の社会的な記録を 後世に伝えたい

私は栃木県の出身で熊本大学に赴任して十数年になります。「熊本には地震が起こらない」と言われてきましたが、今回の熊本地震を経験した後初めて「実は明治22年に熊本で大きな地震が起きていた」ことを知りました。その10年少し前に起きた西南戦争についてはそれほど語り継がれているのに、なぜ地震については社会的な記録が跡形もなく消えてしまったのか？今回の熊本地震もこれから「歴史」に変わっていくはずですが、災害の社会的な記録を後世に伝えなければならぬと思います。そこで、永青文庫の

研究の守備範囲である「江戸時代以前」の震災の歴史について可能な限りまとめるため、同僚と一緒に調査をすすめました。

江戸時代の熊本城は常に被災し、 被災と修復を繰り返してきた！

熊本地震で被災した国特別史跡熊本城の修復には、数十年かかると取り沙汰されています。どのような根拠・判断で流れた情報なのかは不明ですが、私たちはこの時間をどう捉えたらいいのでしょうか？熊本城が“現役”だった江戸時代の震災と修復の歴史から、私たちの熊本城との向き合い方を考えてみましょう。

1. 寛永2年(1625)の熊本大地震

加藤清正が熊本城を「完成」させた慶長12年(1607)からたった18年後、熊本城は大地震によって壊滅的被害を受けていました。地震発生から1か月後、当時、小倉藩主だった細川家から肥後にお見舞いの使者を派遣。その使者からの報告を奉行所の書記官が記録



- どこかが破損し修復工事が断続的に行われているのが城の本来の姿。
- これから始まり、様々な困難に直面するであろう修復工事の過程も、まさに熊本城の歴史の一部となりうる。
- そのためには、国特別史跡熊本城の文化財としての本質的価値を毀損するような拙速な工事は絶対に避けるべき。



Take-home
message

よろずおぼえがき
した資料が「萬覚書」(永青文庫)です。

「萬覚書」(永青文庫)に見られる

6月17日熊本大地震と熊本城

- ①地震発生は6月17日夜
- ②熊本城天守、「城中の家」がことごとく崩壊
- ③城中にて50人が即死
- ④「煙硝倉」=火薬庫(煙硝8万斤=48t備蓄)が出火爆発、5町8町四方(周囲500~800m)の家がことごとく吹き飛び、周囲6里5里(3~4km)に石垣の石材や屋根瓦が飛んだ
- ⑤重臣の家も被災し、修理を進めている。「城」の修復については「江戸」(幕府)に許可申請している

関東大震災後、歴史学者が過去の地震文献について活字にして本に編纂するという作業が行われました。その中には「萬覚書」も収録されていましたが、孫引きのような形で引用されており、様々な読み間違いなどもあったため、今回改めて解説されました。

その中で、寛永2年の熊本大地震は当時、2016年熊本地震で崩れた熊本城の石垣と同等の被害を受けたのではないかと推測されます。

2. 寛永9年(1632)12月、 細川忠利熊本入城時の状況

*天守閣は再建されていたが、建物の屋根は雨漏りし、塀はボロボロだった! 忠利が小倉藩主だった頃、幕府に申請しながら城の修復を繰り返してきたが、熊本城は塀さえも修復できておらず、穴も空いていた。

*寛永10年(1633)5月にはまた地震が発生、忠利らは本丸には居られず。「地震屋」という耐震性のある特殊な構造の建造物(彦根城にはひとつ残っている)、今後調査する予定)が必要。

*同年8月5日 忠利、幕府に提出する熊本城の工事申請目録を作成(永青文庫「御自分御普請」)

①石垣工事申請…小天守の下北の方、石垣252坪(長さ36間 高さ7間)ほか、全25ヶ所 合1503坪

②塀普請申請…本丸北出口上りの塀22間ほか、全4ヶ所 合113間

【当時の状況】

寛永2年地震の被害を修復しきれぬまま7年後に加藤家は改易となり、熊本城は細川家に引き継がれた。忠利は、相次ぐ地震、水害、落雷の中、幕府の許可を得ながら、石垣や塀などの大規模工事を進めねばならなかった。

3. 熊本城の復旧と 熊本藩の政治・行政

*大名仲間(宮崎 延岡藩の有馬直純)から城普請について相談された細川忠利いわく

…「石垣の築き直しは無用! 危ない所だけ処置すれば良い。城が見苦しいのはどこでも同じ!」

*寛永15年9月、肥後国内での牛の大量死に直面した細川忠利の大名仲間への手紙

…「熊本城の堀・石垣・櫓など幕府の許可を得て、すみずみまで復旧工事を命じていたが、こんなに牛が死んでいるのでは、百姓たちが工事にあたるのは無理だろう。まずは城の工事を止めて、百姓の麦の作付けを待たちに援助させようと思う。政治とはどうにもうまくいかないものだ」

【当時の状況】

- ・城は壊れているのが当たり前。その修復工事はあくまで藩にとっての政策課題の一つに過ぎず、むしろ民政優先が幕政も含めた江戸時代の政治の理想。
- ・倒壊・焼失した天守閣が再建されなかった城は意外に多い: 江戸城、大坂城、金沢城、八代城 etc.

細川忠利の書状に見る熊本城の修復と地震

○寛永9年(1632)12月25日

(伊丹康勝宛、『細川家史料』16-1871)

熊本城普請之儀者、下々有付候時分、緩々と可得御意と存候、塀など落候所八、小倉にてのごとく繕申度候、但小倉之儀八度々得御意候ての事に候、熊本八へいも直し不申分にて可有之候哉、屋ねのり、へいの六八繕申にて可有之と存候通、丹後殿・讃岐殿・大炊殿などへも御物語候て可被下候、能かけん頼入候

○寛永10年(1633)5月11日

(狩野是齋宛、永青文庫『部分御日記 災変部』)

一、熊本地震之事、少ツ、切々洵候へとも、此程八遠のき候、あふなく候て、庭のなき本丸に八被居不申候、本丸二八二条敷者有之庭八無之、四方高石垣、其上矢倉、天主、中ノあふなき事にて候事
一、罷下得 御意、地震屋を仕候庭を取不申候へ八、本丸に八被居不申候、此由柳生殿へ物語可申候事

○寛永11年(1634)8月30日

(有馬直純宛、『細川家史料』18-2550)

御門わき石垣、は五六間程くミ申候由、如元可被仰付哉と被仰越候、中々御無用二而御座候、道へ崩かゝり候八、人の通候道御座候程に御引のけ候而、少もノ石垣御築直之儀御無用二而御座候、城之見苦事八何方も同前儀候、不被得御意候而八、少之御普請も御勘忍、御尤候事

○寛永15年(1638)9月5日

(小笠原忠真宛、『細川家史料』24-4829)

熊本堀・石垣・矢倉など普請之儀、右得御意候へ八、可申付之由度々御奉書被下候へ共、有馬事彼は普請不仕候間、又得御意候へ八、連々二可申付之由御老中へ被仰越候、忝存、只今はしノ普請申付候へ共、か様二生死候て八、百姓透たと作候儀■成間敷候間、先普請を止、麦之時分者百姓の手前侍共二すけさせ可申と存事候、何共仕置二仕兼候事



東日本大震災・熊本地震の経験から復興へ —経験を教訓に変え、次の世代に つなげるために

東北大学大学院博士課程修了。2000年より同大学院工学研究科附属災害制御研究センター教授、2014年より現職。津波数値モデル移転国際プロジェクト責任者。東日本大震災復興構想会議検討部会などのメンバー、気仙沼市中島海岸・津谷川災害復旧事業に関する検討会委員長。2014年NHK放送文化賞、2015年文部科学大臣表彰、2016年防災功労者内閣総理大臣表彰。

【専門分野】津波工学、津波防災・減災技術開発、津波被害調査など

教訓とは？

熊本地震から半年。多くの経験を教訓に変え、伝え、後世につなげていく必要があります。

「教訓」とは「おしえさとすこと」であり、自分にとって得るものがあることです。さらに、防災・減災においては、過去の経験の中で、将来あるいは他の地域でも役立つ知識や知見を教訓とよんでいます。

2011年3月11日

—東日本大震災で得た主な教訓

私たちは3.11から以下のことを学びました。

- ・災害時にどのような危険があるかを評価し、それを住民に理解してもらうこと
- ・特定の地域や期間の中で、地域ごとの考え方や役割を考えながらリスク管理を行うこと
- ・災害時の緊急支援体制や緊急対応、復旧の際の情報発信、コミュニケー

シジョン管理について事前に対策を講じておくこと

そして「過去の災害からの教訓を後世に記録として残すこと」です。そこで、SNSなど様々な新しい媒体を活用して新しい「伝え隊」を作りたいと考えています。

個々の災害の経験を記録に残し、伝える

私は津波の研究をしています。3.11、あの日あの時刻の災害を研究して得られる知見は「普遍的」ではありません。それでも記録として残しておくことが大切です。

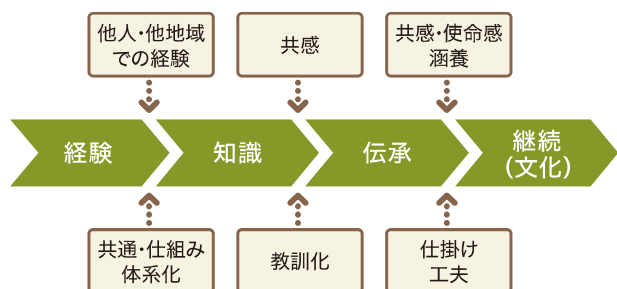
内閣府の「一日前プロジェクト」では、地震や水害などの被害に遭われた方々に「災害の一日前に戻れるとしたら、あなたは何をしますか」と問いかけ、それぞれのお話や体験談の中から気づきを得ることを目的としています。

例えば、今回の熊本地震と3.11東日本大震災や他の地域の他の災害などについて、一日前プロジェクトで得られたエピソードや自分が直接経験したことな

ど、個々の経験を共有することが教訓への第一歩です。そして、それらの経験の中から共通項、仕組みを学び、より普遍的な内容を「教訓」として伝えることが「伝承」です。伝承された教訓は、いつしか生活に溶け込み、定着し、防災文化として世代を超えて受け継がれていきます。震災の体験を忘れないように伝えていく「震災伝承モデル」は、いつかまた忘れた頃にやってくる災害への備えにもなります。100年先、1000年先までも伝えるには、人々に共感してもらうための工夫や「これを伝えなければ」という使命感も必要です。私たちは、そのような視点で研究活動を行っています。その原点ともなった3.11を振り返ってみましょう。

3.11を振り返る！

2011年3月11日にマグニチュード9の地震により巨大津波と福島原発事故が連鎖的に発生した東日本大震災。宮城県沖では、震災前から、30年以内に



【震災伝承モデル】

日本では、今後も様々な災害が発生し、想定を上回る場合もある

Take-home message

「過去の経験・教訓は重要。
しかし、固定してはいけない」
「生きる力をつける！」



大きな地震が来ることが予測されていたため、耐震化などの対策を講じていました。ただし想定されていた地震の規模はマグニチュード7.5または8程度であったのに対し、実際の地震はマグニチュード9、世界で4番目という想定外の規模となりました。

さらに、その後に60mを超える大津波が来襲。地震発生3分後の14時49分に発表した津波警報第1報では、予想される津波の高さは宮城県で6m岩手県や福島県では3mでした。しかし、地震発生から20～30分後に到達した津波の規模は場所によっては10倍以上となりました。

なぜ津波の規模が過小評価と なったのか？

1) 当時の地震の規模の評価

警報は、3分間揺れている間に強震計で測定して発せられました。強い地震は長時間、長周期で揺れます。その3分間の記録がM8.3でした。実際はM9だったので、10倍以上の誤差が生じています(マグニチュードは地震エネルギーを表す尺度で、0.2違うと2倍、1違うと32倍のエネルギーになる)。推定した地震規模により津波高さの予測が過小評価となったことは避難の遅れにもつながったと考えられます。

2) 過去400年の記録から 宮城沖地震を予測する

三陸沿岸では、過去に何度も津波の来襲があったので、様々な対策をしてきました。しかし、宮城県牡鹿半島より西側(仙台湾)では地震・津波が少なく、対策が不十分でした。

過去400年の地震・津波の記録をたどると、宮城南部から福島までの記録は殆ど残っておらず、400年以上前に遡ると、断片的な情報しかなく、評価しきれませんでした。

3) 牡鹿半島の役割

牡鹿半島は、人工的な防波堤の役割を果たし、仙台南部、東松島、石巻を守ってくれていました。しかし、今回は津波が南北に大きく広がり、福島、仙台南部などでも被害がありました。牡鹿半島は、下からくる津波に対しては、防波堤というよりもむしろガイド(津波を導く)の役割を果たしたといえます。このように、津波の被害は、発生する場所や状況によって大きく変わります。

強勢の津波が来襲したことで、土砂の洗掘や堆積があり地形も大きく変化を遂げ、現在も津波前の状態には戻っていません。復興を考えると、被災者が元々住んでいた地域には戻れない可能性があります。さらに、2次災害として液状化や火災もあり、その原因は地震ではなく

津波であり、「津波火災」と呼ばれます。

当時の記録をアーカイブとして 残す取組み

1) 被災地の映像

国土交通省の防災ヘリコプターは地震発生から約30分後に仙台空港を飛び立ち仙台市街ほかの映像を撮影しました。

・30分後の仙台市街の様子

火災は発生しませんでした。停電で道路は大渋滞。新幹線は緊急停止しましたが無事でした。

・1時間後の津波来襲による被害

仙台市内の七北田川では逆流が起きました。同時に沿岸部には高さ3mの津波が到達し、陸地にまで流れこみ、2階建の老人ホームは冠水。津波は沿岸部から3～4kmまで入ってきましたが仙台東部自動車道路で止まり、橋などの一部は倒壊したものの、市街地中心部への侵襲を防ぐことができました。

・仙台空港の冠水

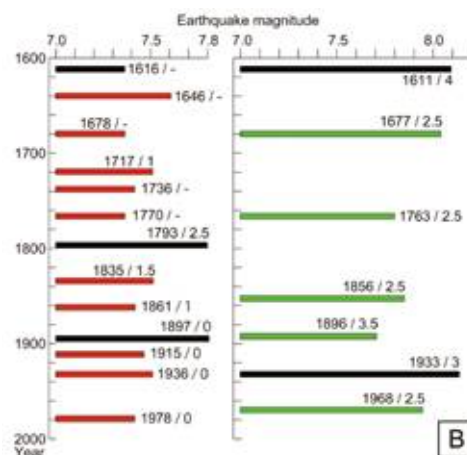
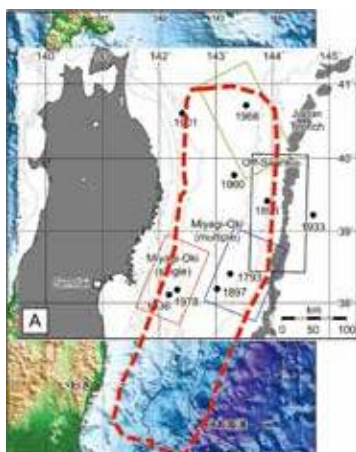
ほぼすべての施設が浸水し、唯一残った建物は3階建高さ15mの仙台空港ターミナル。

・福島原発

第一波が入りこみ、波が戻る頃の映像では、津波が浸水しパイプラインな

三陸沖での過去の 地震・津波活動(約400年間)

T.Hatori, Distributions of Seismic Intensity and Tsunami of the 1793 Miyagi Oki Earthquake, Northeastern Japan, Bulletin of Earthquake Research Institute, University of Tokyo, 62, 297-309 (1987).



どが破損。地下室に海水が浸水し、非常用発電機は機能を失っていました。

・岩手県釜石市

ここは津波常襲地帯で対策が講じられていましたが、沖合の湾口防波堤の一部を津波が乗り越えました。水深はわずか1mでしたが、急激で勢いがある水流のため、木造住宅の強度では耐え切れず倒壊しました。一方、コンクリートの建物は無事でした。このような現象は南北部の各沿岸部でも起きました。

2) 災害科学国際研究所の発足と取組み

東北大学は被災大学として、震災発生から1年後に「災害科学国際研究所」を設立。事前対策から災害の発生、被害の波及、緊急対応、復旧・復興、将来への備えを一連の「災害サイクル」と捉えて研究しています。その柱ともなるのが東日本大震災アーカイブプロジェクト「みちのく震録伝」。産官学の機関と連携し、東日本大震災の記憶、記録、事例、知見を収集し、国内外や未来に共有します。

・東北地方太平洋岸の観測点で記録された揺れの記録(防災科学技術研究所) 3分の間に、岩手県～福島県沖で間隔の短い2回の地震が起き、その揺れが南北に伝わり、茨城県沖付近での地震が起きたことがわかりました。

このように、わずかな時間差でいくつもの大地震が連続して発生したことでM9の巨大地震につながった可能性が考えられます。

・GPSを利用した地殻変動(測地)の定量データ(国土地理院)

GPSを利用したデータから、震災前は3年間で西側にわずか数センチの変動であったのに対し、震災後は二日間で、東側に一気に6～7m以上も動いたことがわかりました。これまでに数百年間たまったストレス・ひずみが解放され、その後、大きな津波を引き起こしたと推測されます。

こうした地殻変動のデータは、将来ひずみがたまり解放される地点の予測などにも役立つことが期待できます。ただし、GPSのデータは阪神淡路大震災以降から蓄積したものであり、100年以上の長い時間軸の中で起こる「地震」を予測するには、長期にわたる観測と記録が必要です。

東日本大震災の教訓から熊本地震を考える

2016年熊本地震では、3.11の教訓からできたこととできなかったことがあります。例えば熊本地震では、多くの方が車中泊避難をされました。車に避難すること自体は問題ではありませんが、時々体操などをして、エコノミークラス

症候群にならないようにすることが重要です。3.11の教訓から今後実施できそうなことや重要になりそうな課題を受け継いで災害に備えることが重要です。

次の災害に備えるための工夫 —みんなの防災手帳

私たちは3.11の経験や教訓を受け「災害対応サイクル」をまとめました。いざ、地震、火山噴火などの災害が起きると、初期から復旧・復興・再生・予防・防災など、それぞれの段階ですべき対応があります。ただし、それらの全てを皆さんに伝えることは難しいと思います。そこで、私たちは、これまで得た教訓や知識を「みんなの防災手帳」という形で1冊にまとめました。これは、母子健康手帳をイメージして作られた手帳です。わが子が生まれる前から生まれて成長するまでを記録するように、発災から復興までの過程で何をすべきか、時系列を追って、必要な情報をまとめています。そのほか、いざという時の家族のルールなどを自分で書き込める欄も設けています。2012年から、東北各県と宮崎県で約70万冊を配布しました。いつ起こるかかわからない様々な災害と共存し、生きる力を高めるためにも、こうした「みんなの防災手帳」を是非、熊本にも広められると良いと思います。

震災記録の収集・整理・発信から国内外への展開 「みちのく震録伝」

35万点以上の震災の記録を収集し、約12万点を公開

みちのく震録伝 東北大学アーカイブプロジェクト



道路からの水平360度映像



WEBページ



被災直後の写真

Lecture 5

Toshio Fujimi

熊本大学大学院自然科学研究科附属
減災型社会システム実践研究教育センター
藤見 俊夫 准教授



京都大学大学院農学研究科博士課程修了・博士(農学)。学術振興会特別研究員、京都大学防災研究所COE研究員、カナダ・プリティッシュコロンビア大学客員研究員を経て現職。

【専門分野】行動経済学に基づく防災・減災政策、科学的不確実性下のプロジェクト評価、災害に対する世帯の適応行動分析についての研究

なぜ人は災害にうまく対処できないのか？ —行動や意思決定のパターンから考える

私は、防災・減災に関する研究・教育活動を行う「減災型社会システム実践研究教育センター(通称:減災センター)」に所属しています。この講演では、災害時の被災を防ぐ、あるいは、被害を最小限にとどめるためにどうすれば良かったか、ちょっとしたコツなどをお伝えしたいと思います。

まさか熊本で地震が起こるとは…

熊本地震は色々な点で私たちにとって驚きでした。熊本での自然災害といえば、水害や土砂災害が真っ先に頭に浮かびます。実際、平成24年7月11日から14日にかけて発生した九州北部豪雨災害では、熊本地域に多大な被害をもたらしています。その傷跡も癒えないうちに、熊本で震度7の巨大な地震が2回も発生したことは驚きです。多くの人々が地震は自分とは縁遠い問題だと考えていたことと思います。しかし、熊本での地震の危険性は以前より指摘されていました。

熊本地震の危険性を伝える 情報はあった

布田川・日奈久断層の存在や、熊本で地震被害がこれまでも過去に発生していることは明らかにされており、行政機関も、地震による被害の想定を行っていました。このことは新聞等のマスメディアでも報道されています。また、熊本市が発行している「我が家の防災マニュアル」やハザードマップは全市民に配布されています。それでも、家具固定や防災グッズ、地震保険への加入など地震への備えを怠ったことを後悔されている方々は多いです。

このように「いつか地震が起こりうる」ということを頭で理解していても、なかなか自分事として捉えることができず、行動が伴わないのが現状です。

地震が起きる前から 「やっとなら良かった……」

私たち減災センターは、地震の際、

どのような対応をしたか、事前によっておけばよかったことなどについてアンケート調査を行いました。熊本大学の職員・学生、地震後に開催した報告会に参加した方々の声を聞いてみると、水・食料・その他の備蓄、家具の固定、避難経路の確認などは実行できていませんでした。いずれも、ほんの少しの手間で大きな減災効果が得られることです。

熊本以外の地域でも状況は同じであり、地震に弱い住宅の耐震化は進まず、火災保険や自動車保険への加入に比べて、地震保険への加入者も増えていません。

頭ではわかっている、 行動にうつせない —災害シンドローム

スマトラ島沖地震では、津波が直前に迫っているにもかかわらず、ぼーっと見ていて逃げられない状況が見られました。頭で考えれば、なぜ逃げないのかと不思議に思いますが、実際、その場

Take-home message

- 自分が今考えていることと記憶の中で関連づけられていることだけに思考の範囲が限られやすい
- 記憶の中で既に関連づけられている評価の影響を受けやすい



防災・減災に関連するバイアスの例

- 1 ベテランバイアス
- 2 確証バイアス
- 3 正常化の偏見
- 4 現状維持バイアス

にいと逃げられません。また、十分な情報提供をした上で「減災対策は必要だと思いませんか?」と聞けば「必要だ」と答える人でも、実施できないことが多々あります。このような現象は、日本だけでなく世界で知られており、**災害シンドローム**とよばれています。

人の心のクセ —認知バイアス

熊本では、地震が起こる危険性が知られていたのに、なぜ多くの世帯で地震への備えが十分行われなかったのでしょうか?その理由の一つとして、人間の心には一定の傾向、**心のクセ**と呼ぶべき「**認知バイアス**」があることが挙げられます。認知バイアスは、生存競争に有利なように脳の仕組みが進化した結果、生じたものであり、日常生活ではうまく機能する、もしくは大きな問題にはならないことが多いです。しかし、災害時のような非日常においては非合理的な判断・行動につながる可能性があります。また、認知バイアスは無意識のうちに作用するため、本人は、その影響を受けていることに気づきにくいです。しかし、自分のクセを理解しておくことでその行動を修正することができます。

認知バイアスの典型的な例としては、「同じ大きさの物なのに、一方がより大き

く見える」というような「**錯視**」が挙げられます。認知バイアスには他にも色々あり、100個ほどが知られていますが、今回は、防災・減災に関連する認知バイアスとして、ベテランバイアス、確証バイアス、正常化の偏見、現状維持バイアスをご紹介します(次頁)。

認知バイアスは 脳の誤作動が原因

認知バイアスは、進化の過程で獲得した、脳の生物学的仕組みです。しかし、野生環境では合理的だった行動パターンが現代社会では不合理になってしまっています。認知バイアスは脳の誤作動が原因ですが、どのような仕組みで起こるのでしょうか?

過去の実験では、「ケニアは何大陸にありますか?」「基石には何色と何色がありますか?」「何でもいいので、動物の名前を一つ挙げてください」と問うと、2割の人がシマウマと答え、半分の人がアフリカの動物を答えたという結果が得られています。先の2つの質問がなければ、シマウマと答える人は1%以下となります。このように、いくつかの情報を頭の中に思い浮かべさせることで、その次の行動を操作できることが知られています。

認知バイアスには記憶の仕組みも関

連しています。脳には数多くの神経細胞(ニューロン)が存在しており、ニューロン同士がシナプスを介して結びつき、情報を伝達します。そして、このニューロン同士の結びつきが強化されることで記憶がうまれます。知識は互いに結びついた形で記憶されてしまうため、「白黒」と「シマウマ」という2つの情報が同時に脳にインプットされると、発火したニューロン同士の結びつきが強化されます。こうして、自分が今考えていることに関連したことばかりを考えてしまい、思考の範囲が限られやすくなります。そして、記憶の中で、既に関連づけられている評価の影響を受けやすくなり、それが認知バイアスを引き起こします。

では、結局どうすれば良いのか?

いざ、災害時にうまく対処するためには、自分の行動や判断が、無意識のうちに認知バイアスに影響される可能性があることを自覚しておくことが大切です。クイズでも、予めひっかけ問題だと知っていれば、ひっかけにくくなります。陥りやすい誤りに気づき、意識的に回避するよう心がけましょう。スポーツの練習と一緒に(図)で、自分の悪いクセに気づき、それを修正しようという意思があれば、より良い選択につながります。



【図】認知バイアスの修正はスポーツの練習と同じ

クイズで学ぶ4つの認知バイアス



Q1

過去最大の台風

- 「過去最大の台風が近づいているので避難してください」との連絡がきました
- しかし、以前に過去最大と呼ばれた台風が何度も来て河川が氾濫したときでも、あなたの家は一度も水に浸かりませんでした

- Q あなたはどう思いますか？
- (1) これまでも大丈夫だったし、今回も大丈夫だろう
 - (2) 今回の台風では家が浸水するかも

オススメ

A (2) 今回の台風では家が浸水するかも

ベテランバイアス

- 経験が豊富であると、情報を解釈する上で、過去の経験が大きな影響を及ぼす
- このとき、過去の経験と現在の状況が異なる場合、経験は判断を誤らせる原因となる

【解説】

- 今回の台風は、以前の台風とは大きく異なるかもしれない
- 今回の台風は現時点での過去最大なので、以前の過去最大の台風より大きい



Q2

カードの規則

- 4枚のカードがあります。
- 片面には数字、もう片面には赤色か青色が塗ってあります



- あなたはカードに下記のルールが成立しているか知りたいです
- 「カードが赤色なら、その裏面の数字は偶数でなければならない」

- Q 下記のどれを調べたほうがいいですか？
- (1) 「赤色」カードの裏と「8」カードの裏
 - (2) 「赤色」カードの裏と「3」カードの裏
 - (3) 「赤色」カードの裏と「青色」カードの裏

オススメ

A (2) 「赤色」カードの裏と「3」カードの裏

確証バイアス

- 自分が本当だと思っていることを確かめるための情報は探すが、反証となるような証拠を無視したり、探す努力を怠ったりする

【解説】

- 「カードが赤色なら、その裏面の数字は偶数でなければならない」
- 「8」カードの裏が青色でも、上記のルールは破られていない青色のカードの裏については何も言ってない
- 「3」カードの裏が赤色なら、上記のルールは破られてしまう
- ルールに沿った例を確認することは得意だが、反証となる例を探すのは苦手



Q3

電車内の煙

- 電車に乗っていると、煙がどこかから漂ってきました
- 車掌からは何のアナウンスもありません
- 周りの人たちも落ち着いて座っています

- Q あなたはどうしますか？
- (1) なんだろう、もう少し様子を見よう
 - (2) 火事かもしれない、すぐ逃げよう

オススメ

A (2) 火事かもしれない、すぐ逃げよう

正常化の偏見

- 危険な状況であることを否定したり、楽観視したりする傾向

【解説】

- 大邱(テグ)地下鉄放火事件(2003年2月18日)が同じ状況
 - ・192人が死亡、148人が負傷
 - ・指令センターが火災報知機の誤作動と思い込んだ
 - ・煙が出ても乗客が避難しようとしていない
- スマトラ島沖地震・津波



Q4

おすすめめの契約内容

- あなたは自動車保険を購入しようと思っています
- 保険会社から、「お客様のお車ではこの契約内容が人気があります」を勧められました
- 契約内容をパッと見たところ、特に問題なさそうでした

- Q あなたはどうしますか？
- (1) すすめられた契約内容のままにする
 - (2) 契約内容を吟味して変更する

オススメ

A (2) 契約内容を吟味して変更する

現状維持バイアス

- ちょっとした変更でも面倒くさがり、現状を維持したままにする傾向
- 重要な事項でも、初期設定のまま放置してしまう

【解説】

- 人気のある契約内容が自分の状況に合っているとは限らない
- 保険の契約は事故が起こったときに非常に重要になるので、適当に決めるべきではない